

学びの広場



京都市教育委員会
教員養成支援室
令和8年3月21日 No.11

卒塾おめでとうございます

第20期の皆さん、卒塾おめでとうございます。

京都教師塾での学びが、これからの人生で出会う様々な出来事や困難を乗り越えていく上で、皆さんの大きな力となることを願っています。京都教師塾で学んだこの一年は、順調なことばかりではなかったかもしれません。教師を目指す自分自身への迷いや不安、思うようにいかないもどかしさを感じた場面もあったことでしょう。それでも皆さんは、同じ志をもつ仲間と出会い、語り合い、互いの考えに触れながら、学び続けてきました。

京都教師塾で培ってきたのは、知識だけではありません。一人一人の子どもに真摯に向き合おうとする思いや、よりよい教育や授業を問い続ける姿勢、仲間とともに学び合い、高め合ってきた経験です。それら一つ一つが、これから教師として歩んでいく皆さんの確かな土台となっていくことを願っています。

京都教師塾における学びは、ここで一つの区切りを迎えます。しかし、教師という道に学びの終わりはありません。これまで積み重ねてきた学びの意味を改めて振り返り、次のステージへとそれぞれの歩みを進めていってください。

今日迎える「ゴール」は、未来へと向かう新たな『スタート』です。京都教師塾で学んできた皆さんが、『一人一人の子どもを徹底的に大切にできる人間味あふれる温かい教師』として活躍されることを心より祈念いたします。



クラス担当の先生方からのメッセージ

1組・2組 藤田 路乃 専門主事

20期生の皆さん、卒塾おめでとうございます。日々忙しい中、本当によく頑張ってきました。色々な学びから視点が広がり、「先生になりたい」という願いが、「こんな先生になりたい！」という強く熱い想いに変わってきたのを感じます。『出会いが財産』です。この教師塾でもたくさんの出会いがありました。これまでの出会いを大切に、さらに学校現場での様々な人との新たな出会いに期待し、進んでください。

先生は『未来』を創る仕事です。夢に向かって努力をし続けている20期生の皆さんの未来をこれからも応援し、楽しみにしています！



5組・6組 太田 勝 専門主事

教師塾での時間は「答えをもらう場」ではなく、「自分の答えを探す力を育てる場」だったと思います。「正解のない問い」に向き合い続けたみなさんだからこそ、目の前の子どもたちと誠実に向き合える先生になれるはずです。これから先、迷うこともあると思います。でも、その迷いこそが成長の証です。あなたは一人ではありません。ここでつながった仲間がいて、あなたの歩みを信じている人がいます。子どもたちも、ともに悩み、ともに考え、ともに笑える先生を待っています。



3組・4組 中村 季弘 専門主事

卒塾おめでとうございます。皆さんの教師を目指す熱い思い、そして、回数を重ねるごとに学びを深め成長していく姿に、頼もしさと期待感を持って見させていただいていました。未来を担う子どもたちの成長に携わっていきたいという思い、教師を目指す強い志、そして、皆さんを支えてくださっている方々への感謝の気持ちをこれからも大切にしていってください。

今後、みなさんが子どもたちと一緒に笑顔で過ごし、活躍されていることを願っています。応援しています。

7組・8組 竹内 直美 専門主事

卒塾おめでとうございます。皆さんの教師への憧れ、情熱、意欲を強く感じながら、一緒に楽しく充実した時間を過ごせました。「学び続ける教師」「子どもはできる存在」「チーム学校」、...どんな言葉が心に残りましたか。めざす教師像に向かって、塾での学びを自分の軸や原動力に、アップデートしながら頑張りました。子どもとの出会いが待っていますよ！

「Do my best 仲間と共にできることを精一杯。満点でなくていい。大丈夫、自分を信じて。」

応援しています。

グループアドバイザーの先生方からのメッセージ



1組 福森 徹也 先生

卒塾おめでとうございます。
教師になりたいという明確な意思を持ち京都教師塾に入塾された皆さん、同じ志を有するもの同士が集う中で密度の濃い学びを得られたと思います。皆さんには大いなる可能性があります。今後採用試験を受けられることになると思いますが、ぜひ京都市を選んでください！皆さんと一緒に仕事できる日が来るのを楽しみに待っております。

2組 福村 智子 先生

塾生の皆さん、ご卒塾おめでとうございます。教師塾での皆さんは、常に情熱にあふれていました。その情熱をこれからどうするかは、皆さん自身です。「問いをもつ」「探究する」「熟考する」「自省する」ことを大切に、情熱の炎を消さないでください。そして、ここで学ばれたこと・経験されたことを是非、これからの人生に活かしてください。

3組 杉村 朗 先生

約半年間、塾生の皆様は学校や職場では体験できない学びをされてきました。教師の魅力は、児童・生徒の成長に全人的に関わり伴走できることです。少子高齢化やグローバル化が進み、AI(人工知能)がどんどん発展してくる中で、これからどんな力を児童・生徒につけていくことが必要なのでしょう。教育の不易と流行とは何なのかをしっかりと見つけられるようになって下さい。

4組 小野 美奈子 先生

塾生の皆さん、ご卒塾おめでとうございます。全体会や分散会での皆さんの熱心な姿に頼もしさを感じ、私自身も励まされていました。「教師になりたい」という今の熱い思いや教師塾で学んだ多くのことを糧にして、夢を叶えてください。現場に出ればつらいことやしんどいこともあります。周りには支えてくれる人たちの存在があり、子どもたちの笑顔が待っています。どうぞ自信をもって一步を踏み出してください。一緒にお仕事ができることを楽しみにしています。

5組 小川 秀 先生

将来子どもたちと関わっていく中で、悩みや迷いがあることも間違いありませんが、学校の先生はやりがいがある楽しい仕事です。自信を持って前に進んで下さい。そして、すべての子どもを大切にして下さい。常に理解しようとし、しっかり寄り添ってあげて下さい。
「包み込む愛情」を大切に。

6組 小林 一弘 先生

塾生の皆さんの学ぶ姿勢、厚く真剣な思いを間近で感じることができました。そして子どもたちの未来、教育界の未来は明るいと確信できました。今後も初心を忘れず自己研鑽に励んでくださることを期待しています。

7組 上田 元司 先生

卒塾おめでとうございます。教員を志し強い気持ちを持った皆様と学ぶことができ、大変うれしく思います。グループ協議で自分の思いを真剣に語り、仲間の意見に耳を傾け、互いに高め合い、磨き合いながら多くを吸収しようとする姿に、回を重ねるごとに皆様の成長を感じることができました。教師塾での学びは、将来の教師生活において皆さんを支える力になります。この学びを忘れることなく、自分が思い描く理想の教師を目指して、これからも取り組みを進めてください。近い将来、学校現場で一緒に仕事ができることを楽しみにしています。

8組 下村 貞之 先生

今年度で教員生活46年の私でも、いまだに教師という生涯をかけて打ち込める素晴らしい仕事に出会えた事を心からよかったですと感謝する日々を過ごしています。是非皆さん方もこの仕事に就いて、沢山の子どもや保護者に寄り添い育て支えてあげてください。

授業実践講座②[模擬授業]



授業実践講座②では、授業実践講座①終了後に作成した学習指導案をもとに7分間の模擬授業を行いました。授業をすることに向けて、児童生徒が思わず考え、発言したくなるような発問とはどのようなものか、どのような意図や目的をもってその学習活動や支援を行うのかなど、自らに問い返ししながら授業づくりに向き合う塾生の姿が見られました。

緊張感のある中での模擬授業となりましたが、授業後には指導主事の先生方からの指導助言や、塾生同士のグループディスカッションを通して、さまざまな視点に触れながら自分自身の授業を振り返ることができました。

教材を通してどのような力をつけたいのかを常に意識すること、学習活動や板書、支援について、児童生徒の実態を踏まえながら目的や意図をもって考えることの重要性を学ぶことができました。さらに、教師の言葉遣いや言葉かけ、立ち居振る舞いが、児童生徒の思考や学びに大きな影響を与えることも、実践を通して実感することができました。

丁寧に準備をして授業に臨み、実際に授業を行って感じたことや考えたことをもとに授業を改善していくこと、そして、その積み重ねによって自分自身の力を伸ばしていくことの大切さを学ぶ機会となりました。

仲間のレポートに学ぶ



授業実践講座を通して、授業づくりの難しさと奥深さを改めて実感しました。今回意識したのは、一人で考える時間とペアで交流する時間のバランスです。まず自分なりの考えをもつようにしてから対話に入ること、思考がより深まるのではないかと考えました。しかし実際にやってみると、発問が広がったため、問い返しも十分に具体化できていなかったことが課題として見えてきました。どの問いで何を考えられるようにするのかを、より明確にしておく必要があると感じました。

同じグループの塾生の模擬授業を見ていると、前時とのつながりが意識された授業は、私にとってもとても分かりやすく、内容のつながりが違和感なく納得できるものであると感じました。本時の活動として完結させるのではなく、これまでの学びの延長線上に今回の活動を位置付けることが、理解の定着につながることを学びました。また、私は説明が一方方向になっている場面があったことや、他の考えを引き出す問い返しがあるとさらによかったという反省から、子どもの思考を広げる働きかけの重要性を改めて検討していきたいと思いました。さらに、教師が話すこと以上に、話を聞いている側の様子を観察することが大切だという助言も心に残っています。発言内容だけでなく、表情や反応、つぶやきから理解度や迷いを読み取る力が求められることに気づきました。支援しすぎると子どもの思考を限定してしまう可能性がある一方で、任せきりにすると学びが深まらないこともあります。その見極めこそが授業者としての力量につながると感じました。また、限られた時間の中で活動を組み立てる難しさも実感しました。時間配分に余裕がなくなると、子どもの考えを十分に取り上げられなくなってしまいます。あらかじめ展開のパターンを想定し、どこを柔軟に、どこを大切に扱うのかを整理しておく必要があると学びました。同時に、完璧な流れを目指すよりも、その場の子どもの姿に応じて修正する姿勢の大切さも感じました。

短い実践でしたが、準備段階から多くの時間をかけて悩んだ分、自分の課題が具体的に見える機会となりました。授業はうまく進めることが目的ではなく、子どもの思考をどれだけ引き出し、深められるかが大切であると改めて考えさせられました。今後は一つひとつの発問をこだわりながら、子どもの姿を軸にした授業づくりを意識し、実践を積み重ねていきたいと思います。

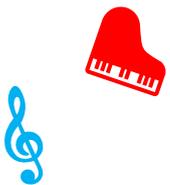
ワークシートの内容も含めて、準備を丁寧にされていたことが印象的でした。また、児童の考え方の共通点や違う点を共有しようとするなど、思考を深めることを意識しながら展開していることも伝わってくるような内容でした。一方で、他の人の模擬授業を見ることで、「めあてからの活動のつながりをしっかり意識したい」と振り返ることもできました。指導主事からの口頭試問や助言により、学級全体を巻き込むような抑揚のある話し方の大切さへの気づきもありました。指導案どおりに進めることに意識がいきがちですが、児童の表情や反応、つぶやきなどに応じた、「子どもの姿を軸にした授業づくり」を意識したいと考えるようになったことは、今後につながる大きな学びとなりましたね。

～クラス担当スタッフからのコメント～

2月21日(土)実施



2月28日(土)実施



映像配信【特別講座①～⑧】～塾生レポートより～



特別講座① 京都教師塾 佐藤 卓也 塾長『教師の使命とやりがい』

★教育はすべての子どもに希望を与えるものであり、その中で教師はどの子どもよりよく生きようとしているのだという信念をもって向き合う必要があると改めて感じることができました。「教育は人なり」という言葉の通り、教育の根幹には人間同士の関わりがあり、教師は子どもを見つめ、子どもの変化を促す存在でありながらも、自身もその過程で成長していけるのだと感じました。

★特に印象に残ったのは、「子どもを注意深くみる」という視点である。見る・観る・視る・診る・看るといった多面的な「みる」を意識し、観察だけでなく、自分の経験や想像力、仲間の意見を取り入れながら、子ども理解を深めていく必要がある。また、教師の期待が子どもの行動に影響する「教師期待効果」がある一方で、逆のゴーレム効果もあることから、日々の声かけや態度が子どもの成長に直結していることを忘れてはならないと感じた。



特別講座② 総合教育センター指導室 島本 由紀 参与『市民・地域とともに育む京都ならではの教育』



★京都に住み、京都で学ぶ子どもたちにとって、京都に古くから受け継がれてきた伝統文化を学習することは、文化への誇りや豊かな感性を育むとともに、地域に根ざした教材として児童の興味・関心を高める効果があると考えます。このような学校と地域が連携した授業は、地域の方々の理解や協力があって実施できるものである。地域の方々の協力により、児童・生徒が普段えられない貴重な経験ができることから、教育的に大きな価値をもつ授業であると感じた。

★少子化の時代で、地域の歴史や伝統行事などが薄れていくなか、学校と連携して、歴史や伝統行事を伝えていくことで、後世に繋げていくことができると感じた。京都市の学校では、京都ならではの体験授業も行っているため、なかなか個人では学ぶことがない茶道や華道なども、学校で体験することができ、子どもたちにとっても、学校の授業で初めて学ぶことで、そこから興味も持っていけるのではないかと思います。

特別講座③ 総合教育センター 松村 一也 指導主事『学校における人権教育をすすめるにあたって』

★日常や言葉のやりとりで人権に気づききっかけが多く存在しているという視点は、自分にとって大きな気づきとなった。講座で、「まず自分自身が大切な存在であると感じられていることが前提」が強く印象に残っている。自分を大切にできない状態では、他者の尊厳にも目を向けにくい。だからこそ、人権教育は大切なのだと心に残った。子どもが「自分ほここにいていい」と安心して思える環境づくりこそ、人権教育のスタート地点なのだと感じた。

★知識の習得にとどまらず、その知識をもとに人権感覚を磨くこと、すなわち人権的な見方で考え、他者への想像力を養うことも重要であると感じました。自分の立場からだけでなく、異なる背景をもつ人々の立場を想像して考える姿勢を教師が示すことは、生徒が人権について主体的に考える上で大切な手本となると思いました。



特別講座④ 総合育成支援課 藤田 昌資 首席指導主事

『京都市における一人一人の教育的ニーズに応じた支援の実現に向けて』



★講義を通して、特別支援教育において最も大切なのは、子どもの願いや思いに寄り添い、その子なりの成長を支え続ける姿勢であると考えられるようになった。できる姿を認め、小さな達成感を積み重ねることで、子どもは自ら学び、社会の中で生きていく力を身に付けていく。今後教育に関わる立場として、子ども一人一人の背景に目を向け、支援の意味を考え続けられる教師でありたい。

★教育的ニーズに応じた支援は、子どもの可能性を最大限に引き出せるような学びの場の設定が重要で、そのために子どもの実態把握で「できる姿」を捉えることが重要になるということ学んだ。また、子どもたちに学ぶことを諦めさせないように、一人一人の「できる姿」に着目して、子どもの主体性を引き出し、達成感を味わえるように支援しながら、可能性を伸ばしていける教師になりたいと思った。

特別講座⑤ 体育健康教育室 谷垣 賢 首席指導主事 『学校における子どもの健康と安全』



★講義を通して、学校組織全体で子どもの命を守りきるために必要なことがあると考えた。それは、実用性のある危機管理体制の整備である。何も起きないことを信じるのではなく、最悪の事態が起きるかもしれないと疑い、入念に準備をしておくことによって子どもの命を守るという学校の使命・責任を果たすことができると考えるからだ。

★講義を通して特に心に残ったのは、京都市が掲げる「一人一人の子どもを徹底的に大切に」するという教育観が、すべての取組の根底に一貫している点である。健康教育四領域のいずれにおいても、子どもたちを一括りにするのではなく、それぞれの実態や背景を踏まえながら支えていこうとする姿勢が感じられた。子どもの命や健康を守るとは、事故や疾病を防ぐことにとどまらず、その子自身が大切にされていると実感できる環境を整えることでもであると学んだ。

特別講座⑥ 総合教育センター 津高 修一 指導主事 / 矢本 雄生 指導主事 『デジタル社会の善き担い手となる子どもたちの育成 ～情報活用能力の向上を図るために～』

★インターネットが普及した現代では、必要な情報を取捨選択し、情報が信頼できるものか否かを判断することや、児童生徒自身が発信する情報が正しいか、他人を傷つけるものではないかを判断することが重要であるため、GIGA スクール構想における情報活用能力・情報モラルの育成は、これからの社会において非常に重要であると考えます。

★デジタル社会の発展に伴い、インターネット上でのいじめやネット依存など、さまざまな問題が生じている。これらの問題に対処するためには、単にルールを教えるのではなく、「自分だったらどうするか」と自分事として捉え、主体的に考える機会を設けることが重要であると感じた。学校教育においては、デジタルとアナログの双方の強みを、教師だけでなく子どもたち自身が理解した上で活用していくことが大切と分かった。



特別講座⑦ 教員養成支援室 寺田 沙織 指導主事 『わかる喜びと学ぶ楽しさを実感できる授業をめざして ～授業づくりのポイント～』

★対話を取り入れること自体がゴールになるのではなく、生徒が「考えを伝えたい」「他者の意見を聞いて自分の考えを深めたい」と自然に思える状況をいかにつくるかが、教師の役割であると感じた。生徒一人一人のつばやきや迷いを出発点にしながら、学びが連続し、深まっていく授業を構想していくことの重要性を、強く実感した。

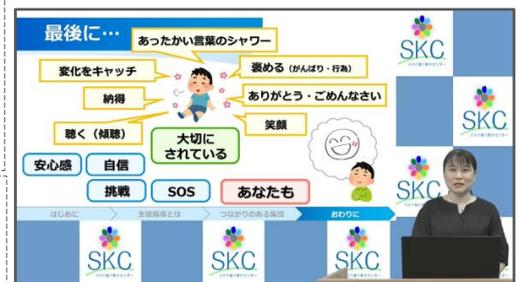
★安心して学ぶことができる学級というのは、わかる喜び、学ぶ楽しさを実感できる授業の土台となる。安心して学べる学級だからこそ、導入部分での「分からない、なぜ? どうして?」という気持ちも表現しやすくなると思う。また、展開の中で分からないことがあったとしても、分からないことは恥ずかしいことではなく、みんなで分かるようになればいいのだという雰囲気が形成されていくと学んだ。



特別講座⑧ 生徒指導課 赤井 範子 副主任指導主事 『つながりのある集団づくり ～いじめ・不登校の未然防止の取組～』

★講座の中で特に印象的であったのは、「問題行動＝問題提起行動」と捉えることである。問題行動をする子どもに対して、その行動だけをみて「よく人を困らす子」と捉えるのではなく、この行動の中には、子どもなりの想いやSOSといった、何かのメッセージであると捉えることが、問題の未然防止や課題解決につながるという理解した。そのように考えると、子どもの問題行動の全てには、子どもなりの想いやSOS、家庭事情といった背景が存在すると考えて、子どもの一つひとつの言動を軽視せず、向き合っていくことが重要であると学んだ。

★「発達支持的生徒指導」を土台とし、すべての児童生徒を対象にした関わりを重視する考え方は、集団づくりの基盤となるものであると感じた。授業や日常の学級経営そのものが最大の生徒指導であり、あいさつや言葉遣い、話を聴く姿勢、互いのよさを認め合う活動など、一つ一つの実践が「つながりのある集団」を形づくっていくことを改めて認識した。



教員養成支援室主催フィールドワーク



京都市の教育の現場を実際に訪れ、教育に対する見識を広げ深めることを目的としたフィールドワークの様子を紹介します。以下に写真とともに紹介しているのは、教員養成支援室主催のフィールドワークです。この他にも、京都市内の学校や研究会など、様々な教育現場のご協力のもと、今年度も100を超える多彩なプログラムが実施されました。塾生は、その中から、自らの興味・関心や課題意識に応じて活動を選択し、主体的に参加しました。

実際に教育現場を訪れ、様々な活動に取り組んだり、教育に携わる方々の話を直接お聞きしたりする中で得た学びをもとに、さらに塾生同士でディスカッションを重ねることで、一人一人が自らの考えを問い直し、教師としての在り方を具体的に考える学びにつながりました。

▼ 伝統文化体験事業 《華道》



▼ 京都市青少年科学センター 科学センター学習の参観／実験学習体験



～市立高校の最先端教育を知る～ ▼ 京都市立開建高校



▼ 野外活動体験 花背山の家



▼ 京都市学校歴史博物館



▼ 京都まなびの街 生き方探究館



▶ 先輩の授業に学ぼう

